

保育内容「言葉」を視座とした絵本の研究

柴田 奈美

要 約

絵本には、児童文化財としての重要な意義があるが、特別な準備がなくとも表面的には子どもに読み聞かせが可能なものである。そのため、保育実習などの場で、深い研究もなされぬまま、安易に用いられるおそれがある。本研究では、学生に絵本に対する認識や関心を深めさせることを目標に、保育内容「言葉」の視点から絵本の研究・創作を行った実践結果をまとめ、考察を加えたものである。

方法は次の四点にまとめられる。① 絵本の児童文化財の意義を認識させるために、学生自身にテキスト等を調べさせ、文章にまとめさせる。② 個々の絵本の特色、絵本の一般的な特色を具体的に認識させるために、既製の絵本の鑑賞をさせる。③ ①②で理解したことが身についたかどうかを確認するため、また、絵本への関心を高めさせるために絵本を創作させる。④ より絵本への興味・関心を高めさせるために、学生の作品を相互に鑑賞させる。

今回の実践は「保育内容『言葉』」の授業の中で行ったものであり、子どもの言葉の発達のあり方を学習させつつ、試みさせた絵本作りであった。学生の感想文から、絵本の児童文化財的価値が実感を伴って認識されたこと、絵本への興味・関心、子どもの発達への関心などが高められたことが把握できた。

キーワード

絵本の児童文化財的意義 あかちゃん絵本の特色 創作絵本

はじめに

「保育所保育指針」（厚生省 平成二年三月二十七日）の「保育内容」には、児童文化財としての「絵本」が取り上げられている。次に、例として三歳児のものと、五歳児のものを記しておく^註。

- 「絵本や童話などの簡単な内容が分かり、イメージを持って楽しんで聞く」（三歳児〈内容〉）。
- 「絵本や童話などの面白さが分かるように配慮するとともに、生活の中でできるだけ言葉と行動や出来事が結びつくように配慮する」（三歳児〈配慮事項〉）。
- 「絵本、童話などに親しみ、その面白さが分かって、想像して楽しむ」（五歳児〈内容〉）。
- 「絵本などを使い、想像力が伸びるように配慮する。また、文字については、日常生活や遊びの中で興味をもつようにする」（五歳児〈配慮事項〉）。

このように、重要な児童文化財として特に採り上げられている。絵本は平易な文章で表現されたものが多く、深い教材研究や、特別な準備をすることなくいきなり読み聞かせることの可能なものである。そのため、保育実習などの場で、時間が残ったから採り上げる、という安易な用い方が実習学生によってなされるおそれがある。

本研究では、保育内容「言葉」を視座として、学生の絵本に対する認識を深めさせることを目標とした実践結果をまとめ、考察を加えたものである。

対象 岡山県立大学短期大学部

平成七年度入学児童福祉専攻一年生 五十名。

授業題目 「保育内容『言葉』」（一年生後期履修）

ねらい

- ① テキスト^註やその他文献を調べさせることにより、絵本の児童文化財としての意義をしっかりと捉えさせること。
- ② 既製の絵本をできるだけ沢山鑑賞させることによって、絵本の一般的な特色を自分なりに把握させること。
- ③ ねらいの①・②を土台として、絵本を創作させることによって、絵本への関心を高め、理解したことが身につく、表現に結びついているかどうかを、自己評価させること。
- ④ 学生の作品を相互に鑑賞させることにより、絵本への興味・関心や、創作意欲を高めさせること。

今回は、「言葉」を視座とする絵本研究であるので、精選された言葉によって創られる「赤ちゃん絵本」を鑑賞の対象とし、学生が創る場合も「赤ちゃん絵本」を原則とするように指示した。また、グループで活動しても、個人で活動してもよいことにした。

一 絵本の児童文化財としての価値

大部分の学生は二人から四人のグループを作り、まとめていった。大方はテキストをまとめたものであり、グループによって多少表現の仕方は異なるが、次のようなことが把握できていた。

- (1) 絵本を繰り返し見たり、聞いたり、言ってみたりすることによって、語彙を豊かにし、絵本を通して言葉で表現する力を育てる。
 - (2) 絵本の世界に入り、いろいろな世界を経験することによって感動する心が育つ。
 - (3) 絵本は視覚的な助けを借りてイメージを浮かべやすいので、想像力を豊かにする。
 - (4) 自分が経験したことと同じようなことが描かれている「生活絵本」では、経験を再認識することによって、知識や理解を深める。
 - (5) 保育者・母親に読んでもらうことにより、心の絆が強まり、情緒が安定する。
 - (6) 絵本の内容を他の活動で表現しようとする意欲を育てる。
 - (7) 絵本を読んでもらっているうちに、文字に関心を持つ。
 - (8) 絵本（もの）を大切に扱うことを知らせる契機となる。
- これらに加え、保育者が読み聞かせる場合が多いので、言葉の音声的な面（言葉のリズム、響き）の子どもの心に直接訴えかける力の大きいことを伝え、日本語に対する豊かで鋭い感性を育てる役割のあること、また、読書教育の基礎となることを指摘した。

二 既製のあかちゃん絵本の鑑賞と考察

学生に紹介した「赤ちゃん絵本」の中から「おふろでちゃぶちゃぶ」(文・松谷みよ子、絵・岩崎ちひろ 童心社 一九七〇年初版発行)の文章表現を場面ごとに、次に記す。

おふろでちゃぶ ちゃぶ

① あひるちゃん

どこいくの

いいとこ

いいとこ

② あれ?

タオルをもった

ねえ どこいくの?

いいとこ

いいとこ

③ あれ？

せっけんもった

ねえ どこいくの？

はっはア

④ わかった！

おふろだ！

グワッ

グワッ

そうだよ

はやく おいでー

いっとうしうは だあれ

⑤ まって

まって

いま せーたー

ぬいだとこ

はやく

はやく

⑥ まって

まって

いま ズボン

ぬいだとこ

はやく

はやく

⑦ まって

まって

いま シャツ

ぬいだとこ

はやく

はやく

⑧ いま パンツ

ぬいだとこ

わーい

はだかんぼだーい

⑨ おふろで ちゃぶちゃぶ

せっけん ぶくぶく

あひると いっしょ

おふろ

ぼく

だーいすき

⑩ あたま

あらって

きゅーぴーさん

右のような十場面で構成されている絵本「おふろでちゃぶちゃぶ」の特色・工夫を、箇条書きで書かせた。

最初はなかなか思いつかないようだったが、書けた学生のものから板書していくと、次のようにいろいろな指摘がなされた。

○ 子どもの好きなあひるが擬人法的に使われている。

○ 男の子が「どこいくの？」を繰り返すが、あひるは「いいところ／＼いいところ」とのみ答えて、どこだろうと考えさせ、期待感をもたせる。

○ 最後の「あたま あらって／きゅーぴーさん」が、かわいらしく、頭を洗うのが苦手な子どもにも、「きゅーぴーさん、して」と言わせるような魅力的な表現である。

○ 繰り返しの表現が多い(どこ／＼いいところ／＼いいところ、

まって／まって／いま ○○／ぬいだとこーはやく／はやく)

以上の指摘で、学生の方からの意見は詰まったので、さらに、次のような点を指摘した。

○ 見開きで一場面となっており、期待感をもたせるために答となる表現は、次頁に表現されている(あひるがおふろに行くとかわかった時点で、「はっはア」とのみ③場面で記し、頁をめくった④場面で「わかったーおふろだ！」としていることなど)。

○ あひると男の子の会話で話が展開していて、①場面から④場面はあひるのみ描かれ、男の子は声のみの登場。次に⑤場面から⑧場面までは男の子のみ描かれ、あひるは声のみの登場。⑨場面であひると男の子が楽しそうにおふろに入っている場面で、変化と盛り上がりがある。最後に「あたま／あらって／きゅーぴーさん」という印象的・魅力的な表現で終わっている。構成面でかなり工夫のなされた絵本であること。

○ 男の子が「せーたー」「ズボン」「シャツ」「パンツ」と次々と順番に一人で脱いでいくこと、おふろに自分から入ること、入浴は楽しいこと、などを自然に子どもに感得させる、生活絵本の一面のあること。

○ 「いっとうしゅうは だあれ」「わーい／はだかんぼだーい」「あたま／あらって／きゅーぴーさん」など、子どもにとって魅力的な表現が使われていること。

○ 「おふろで ちゃぶちゃぶ／せっけんぶくぶく」など擬声語

が使われており、快い・楽しいリズムが生まれていること。

○ 「楽しいおふろ」「おふろに入ろう」などという題名ではなく、おふろで楽しんでいる様子を直観させる「おふろでちゃぶちゃぶ」という擬声語を巧みに使った題名にしていること。

学生たちは、子どもの言葉の発達段階をテキストで学びつつ、右のような要領で毎回一〜二冊ずつ「赤ちゃん絵本」を五回、授業の中で鑑賞し、児童文化財としての絵本にどのような工夫や配慮がなされているか、考察を重ねていった。

講義の中で採り上げた絵本は、次のとおりである。

「もしもし おでんわ」

(文・松谷みよ子 絵・石崎ちひろ 童心社 昭和四十五年初版発行)

「のせて のせて」

(文・松谷みよ子 絵・東光寺啓 童心社 一九六九年初版発行)

「あなたはだあれ」

(文・松谷みよ子 絵・瀬川康男 童心社 一九六八年初版発行)

「いいおかわ」

(文・松谷みよ子 絵・瀬川康男 童心社 一九六七年初版発行)

「いないいないばあ」

(文・松谷みよ子 絵・瀬川康男 童心社 一九六七年初版発行)

「りんご」

(文・松野正子 絵・鎌田暢子 童心社 一九八四年初版発行)

「おかあさんのひざぶんこ」〈第一集〉

(ひらやまえいぞう 童心社 一九八六年初版発行)

「おかあさんのひざぶんこ」〈第二集〉

(ひらやまかず子 童心社 一九八七年初版発行)
 以上のような赤ちゃん絵本を鑑賞させたうえで、「赤ちゃん絵本」として共通する点を、学生に考察させた。

次に、学生の指摘したものを挙げる。

○ 一つの文が短く、リズムカルで快いテンポがある。

○ 繰り返しが多く、規則性がある。

○ 直観的にイメージできるように、擬声語・擬態語が使われている。

○ 子どもにとって身近な素材を取り上げている。

○ 登場人物として子どもと動物が使われている場合が多い。

○ 見開き一頁で一場面が構成されている。

○ 画面があたたかな明るい配色となっている。

○ 字も絵もある程度の大きさがあって、はっきりしていて、鑑賞しやすい。

これらに加えて、次の二点を付け加え、赤ちゃん絵本の考察のまとめをした。

○ 同じ言葉の繰り返しで単調になりやすい面を、登場人物をだんだん増やしたり、登場する動物の大きさをだんだん大きくしたりすることによって、ムードを盛り上げていく工夫をしていること。

○ 一文が簡潔で場面も少ないため、一気に読み聞かせることも可能であるが、一場面一場面をしっかりと子どもに見せて、絵本には書かれていない問いかけを保育者が子どもにし(あるいは子ども

から保育者に問いかけて)、絵本を媒介としたコミュニケーションをはかることができること。

三 赤ちゃん絵本の創作

以上のような、絵本の児童文化財的意義と赤ちゃん絵本の特色を理解させたいうえで、赤ちゃん絵本の創作を試みさせた。

創作するうえで、次の点を注意した。

- まず、主題をはっきりと認識しておくこと(子どもの心にとどめるような気持ちを育ててやりたいか、を文章化したうえで、絵本のストーリーを考えること)。
- 既製の赤ちゃん絵本として共通する点を参考にするとともに、各自の工夫を一点でもよいから加えること。

この二点を注意点とし、あとは自由に作業をさせた。作業時間は九十分授業の四コマ分である。創作のことは最初から到達目標として学生に知らせておいたので、あらかじめどのような絵本にするか、考えていたようである。時間内に完成し、発表することができた。

次に、学生の作品を一例紹介する(十〜十三頁参照)。

- 「ほっかほか」 玉木尚子・三浦道代・田中寿江作
- 創作絵本「ほっかほか」の作者たちは、つぎのように〈主題〉〈特色〉〈努力した点〉を書いている。

〈主題〉

- 明るい・あたたかな心を育てる。
- 動物や太陽など、自然物を身近に感じさせる。

〈特色〉

- 一般によく知られている動物が出てくる。
- 最後に人間のお母さんと子どもが仲よく登場する。
- 短文で読みやすい。
- はぎれが良く、リズム感がある。
- 簡潔な言葉「ほっかほか」の繰り返しでわかりやすい。
- 一場面一場面が擬声語・擬態語・感動詞で始まっていて、興味をもつ。

- 見開きのページに文章と絵がかかっている。
- 温かいものを身に着けたり、持ったり、食べたりすることで体が温かくなること、また優しい人との触れ合いで心も温かくなること、自然に子どもに受け止められるように工夫している。
- 絵が親しみやすく、分かりやすい。
- 文字は折り紙をちぎって貼りつけたもので、温かい雰囲気が出ている。

〈努力した点〉

- 文字や絵を、子どもにとってわかりやすいように、シンプルなものにした。
- 主題の「温かさ」を出すように、色調に気を配った。

○ 一つ一つの文字をちぎり絵のように貼りつけ、細かい作業を時間をかけて行った。

このグループは、主題をはっきりと認識し、絵本の価値・赤ちゃん絵本の特徴を理解したうえで取り組めたグループの一つである。

「ほっかほか」という擬態語の題名も面白い。まず、「ほっかほか」という言葉から、いろいろなイメージが連想できる。表紙のハート型のマフラーが、最後の場面を暗示している。ココアを飲むうさぎ。しかし、「うさぎ」という名詞は表現されていない。言葉「びよんびよん」と耳の長いうさぎの絵でそれを示し、保育者と子どもの間で「これ うさぎ」「うさぎね」といった会話の成立を想定している。続く二場面も同じ。三場面は、意外性をねらって動物ではなく太陽を登場させた。「ほっかほか」の繰り返しが多い中で、あまりにも単調にならないよう、素材の面で変化をつけたのである。四場面は「ぞう」。大きな体の象が豪快にお風呂に入り、水があふれ出る楽しいイメージ。そして五場面、人間の「ぼく」が登場。「ほっかほか」の言葉がなく、「ぼく／ひとり……」と寂しさが一瞬漂う。続く六場面で、「おかあさん」と「ぼく」が登場し、マフラーを巻いて「ほっかほか」と表現。学生たちは、繰り返しや表現の簡単さを意識して創る一方で、構成面では意外性のある場面を挿入しており、最後に盛り上がりのある作品となった。

身体的なあたかさが、精神的なあたかさにまで発展した点が、この作品に奥行きをもたらしてる。

四 反省と今後の課題

まず、今回の「創作赤ちゃん絵本」を鑑賞した学生の感想（抄出）を、次に示したい。

① 手のこんだ絵本が多くて、どのグループも頑張っていると思った。自分が絵本を創っている時は、くり返しの表現を使うことしか頭になかったが、今日の発表を見ると、それぞれのグループの個性が出ていて、ストーリー性のあるものや科学的要素を含んだものなどさまざままで、完成度が高いと思った。

（尾谷麻里・大倉麻梨子）

② どの本もとてもかわいらしく、ほのぼのとしていて良かった。言葉の選び方にも気をつけていることがわかった。作る人の個性がよく出ていて、面白かった。

私たちの絵本は（卵から蝶になるまでを描いたもの）リアルになり過ぎないように、しかしできるだけ忠実なものになるように苦労した。

（近藤史佳・三浦雅美・山中久美・笠原弘美・三宅敏恵）

③ みんな心をこめて絵本を作ったことがとてもわかりました。それが言葉や色の使い方によくあらわれていました。

（大塚美和・篠塚智子・横田由紀子）

④ 自分が思いつかなかったような内容の絵本がたくさんできていて、勉強になった。絵本にはイメージを広げたり、想像力を高めたりする働きがあるが、今日皆の作品を見て、私自身イメージや

想像力が高まったような気がする。これからたくさんさんの絵本を読んだり、本を読んだりして、いろいろなことを感じられる心を養っていきたいと思う。頭の固い大人にならないように……。

(森 恵子)

⑤ 今日、あらためて皆がそれぞれ抱いている子どもへの思いが伝わってきて、感動しました。絵本を通して、子どもに夢や希望を与えることは、大切であると感じました。

(矢田理恵)

⑥ 絵本をつくるのは大変だったけれど、おもしろかった。また、子どもが喜んで見てくれるような絵本をつくってみたいと思った。みんなが作った絵本を見て勉強になった。

(見垣博美)

⑦ みんなのすてきな絵本を、本当に子ども達に読み聞かせてあげることができれば最高だと思う。制作しながら、自分自身も楽しめた絵本作りでした。

(久保貴子)

⑧ これからいろいろな絵本を気をつけて見ようと思っています。絵本といってもいろいろな主張や子どもに感じとってもらいたいことがあることに気づき、奥が深いことを学びました。

(小野由紀子・吉岡恵子)

多くの学生は、自分自身の絵本の創作を通して、友人の絵本の主題や工夫した点を、十分に味わい鑑賞できたようである。一点一点の作品に、友人たちの個性を発見し、好意的に受け取った感想がほとんどであった。

また、絵本の創作・創作絵本の鑑賞を通して、絵本の児童文化財と

しての価値、奥の深さが実感できたようである。そして、絵本を作る楽しさを味わったこと、創作絵本を子どもに読み聞かせたい、という思いの生まれたことも評価したい。

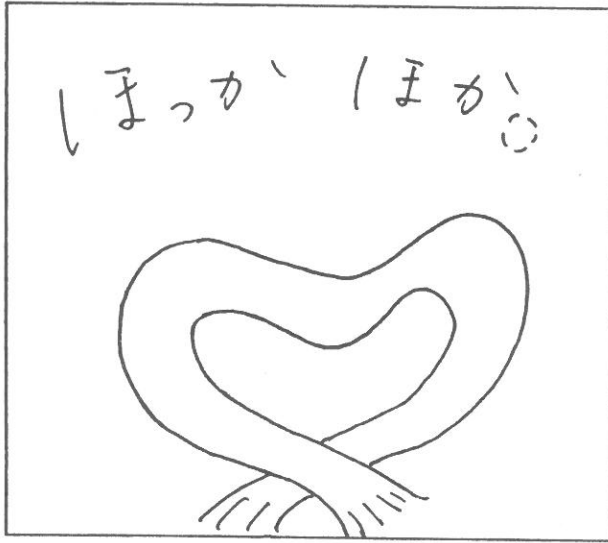
今回の絵本作りの試みは、「保育内容 言葉」(一年生後期に履修)

の授業の中で行ったものであり、学生は子どもの言葉の発達をかなり意識して取り組むことができた。一年生前期に教科目「日本語表現」において児童詩「五十音詩」の創作を行ったが、そのときよりも、はるかに「子ども」を意識して作ろうとしていたことが感じられた。

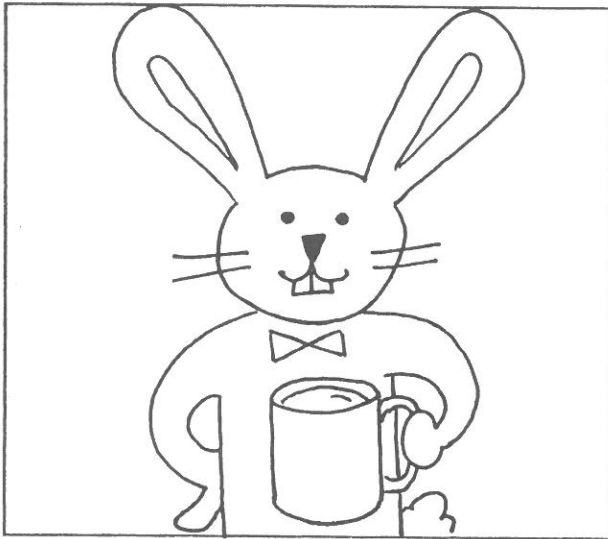
子どもにどのような心を育てたいか、という主題をしっかりと把握させて、創作活動に入ったことも、効果があったと考える。

今回は、「言葉」を中心とした絵本作りであったが、学生の活動の中には当然造形の活動も組み込まれており、造形面への配慮も同時にかなりなされていた。表現の総合化がうまく行われていたと思われる。

今後の課題としては、「言葉」を中心としつつ、身体表現や音楽表現にも結びつくような表現活動を、「保育内容『言葉』」の授業の中に取り入れていくことを考えている。そのことによって、学生が子どもの理解を深め、「言葉」を中心とした表現によって、自分自身の感性を高めることに役立つような指導法を開拓していきたい。

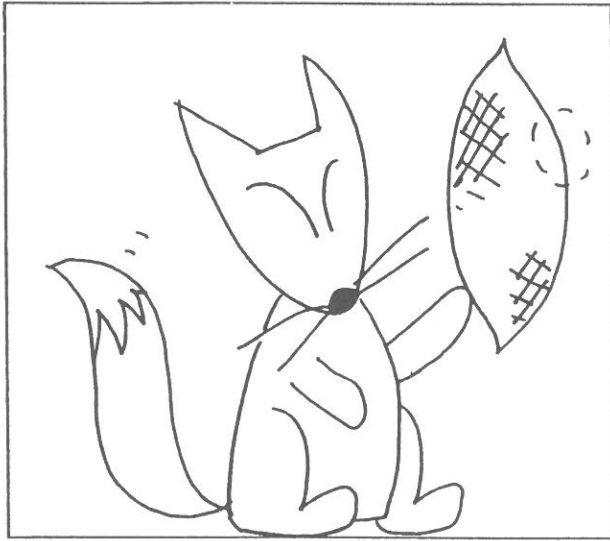


田 三 玉
中 浦 木
寿 道 尚
江 代 子



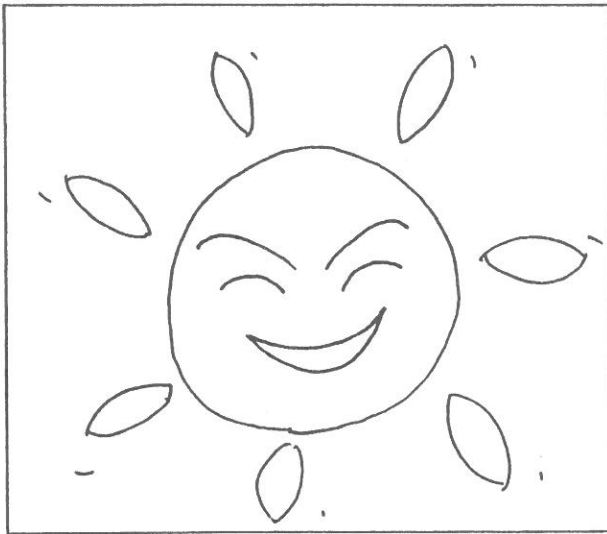
ほっかほか
ココアは
ぼくの
ぴよんぴよん

(1)



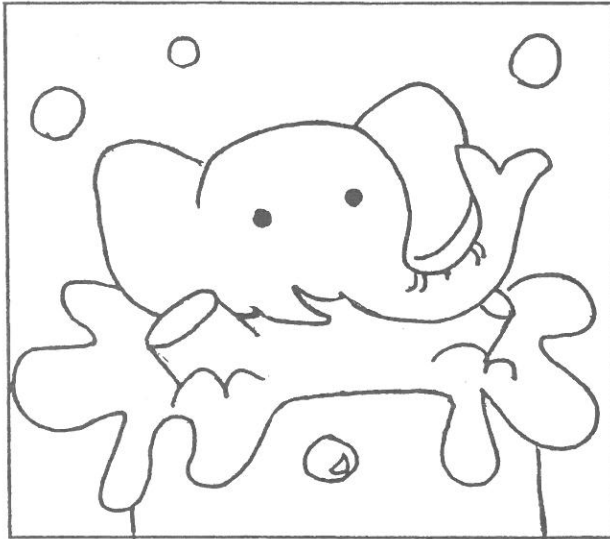
こーんこーん
おおきな
やきいも
ほっかほか

(2)



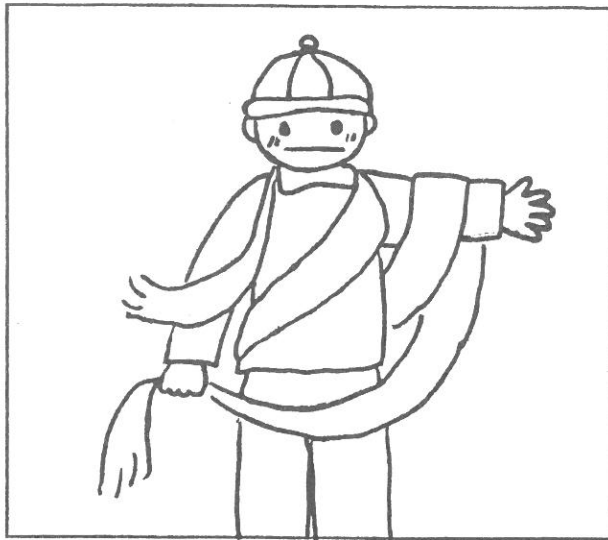
うわぁー
あったかーい
まあるい
おひさま
ほっかほか

(3)



ざっぼーん
おふろで
ちゃぶちゃぶ
ほっかほか

(4)



ぐるぐる
まいた
マフラー
ぼく
ひとりの……

(5)



でもね
おかあさん
となら
こんなに
ほっかほか

(6)



(37)

注① 岡田明編「子どもと言葉」 萌文書林 一九九〇年初版発行

〈付録〉参照

注② 岡田明編「子どもと言葉」 萌文書林 一九九〇年初版発行

注③ 柴田奈美『子どもの言葉と児童文学』 大学教育出版 一九九

六年初版発行 第二章第二節参照

一九九〇年

川原佐公・中西昇・芳賀純編著『幼児教育法講座 言葉へ実技・

実践編』三晃書房 一九九一年

大岡信『詩・ことば・人間』講談社学術文庫 一九八五年

引用・参考文献

岡田明編『子どもと言葉』 萌文書林 一九九〇年

岡本夏木・河嶋喜矩子編『幼児教育を学ぶ人のために』 世界思

想社 一九九四年

本吉圓子『子どもの育ちと保育者のかかわり』 萌文書林 一九

九一年

今井和子『ことばの中の子どもたち』 童心社 一九八六年

岡本夏木『子どもとことば』 岩波書店 一九八二年

吉田定一・大松幾子『子どものことば ことばあそび』 童心社

一九七九年

向井吉人『素敵にことば遊び 子どもごころのリフレッシュ』

學藝書林 一九八九年

高杉自子・阿部明子・大場牧夫・岡本夏木・村井潤一『言葉の獲

得に関する領域 言葉』 東京書籍 一九九〇年

井上共子編著『幼児教育法講座 言葉へ理論編』 三晃書房

平成八年十月二十三日受付
平成八年十二月二十五日受理